

連
句

猫蓑作品集
I



序

昭和五十六年に、猫蓑会の母体である A・C・C 連句教室が発足してから、今年はちょうど十年目を迎える。この間、作られた作品の数は夥しいものであろう。そして、五十八年に「季刊連句」が発刊されて以後は、年四回の猫蓑会をはじめ、沙羅の会などの作品の多くは、この雑誌に掲載されることになったが、各グループによる作品、あるいは仲間同士の文音の作品などは、公表される機もすくなく、従って記録・保存される機会もなかった。

せっかく、心をこめて作った快心の作は、

闇から闇に葬らないで、人に読んでもらい、また、後世に残すというのも、連句人としての本望ではないだろうか。

従来、連句協会の「連句年鑑」に、毎年、猫蓑会から五篇を掲載していたのであるが、昨年不快な事件があつて以来、この「連句年鑑」には投稿しないことになった。このことが「猫蓑作品集」を出す直接の動機になったが、私は却つてよかったと思つてゐる。

その理由として、五篇という少ない数では、近頃のように仲間にすぐれた作品が多い場合、選ぶのに困るということの外に、せっかくの私どもの作品を連句協会による間違つた評価の対象にしないで済むということである。

これで私たちはいやな雑念から解放され、よい作品集を作ることができるだろう。

この第一号は、初めてのことであり、特に準備の期間も短かったのに、歌仙で三十篇近く、二十韻は四十数篇、及び半歌仙一篇の応募があったのは、心強い限りであった。

この勢いをさらに継続、発展させ益々よい作品集とするよう、皆さんの御協力をお願いする次第である。

平成三年きさらぎのころ

東 明 雅

目次

序
歌仙

東 明雅

木犀の	東	明雅	8	あぢさる	中島	啓世	38
大暑	膝おくり	曹人時彦 正江太郎	10	空梅雨	根津	芙紗	40
噴水	市野沢弘子	捌	12	犬蓼	原田	千町	42
神の旅	内田	麻子	14	水澄むや	東	郁子	44
夏木立	梅田	利子	16	新涼や	福井	隆秀	46
秋立つ	大窪	瑞枝	18	十二単	三木	弘喜	48
濃りんどう	上月	淳子	20	駒繫ぎ	本屋	良子	50
啓蟄	米谷	貞子	22	十三夜	八木	聖子	52
リラ冷え	雑賀	遊	24	花三千	矢崎	藍	54
鬼やんま	坂本	孝子	26	花辛夷	山口	みづゑ	56
秋祭	式田	和子	28	蔓くさ	山崎	一恵	58
忙中の夏	下鉢	清子	30	二十韻			
ずぼんぼ	杉内	徒司	32	むし暑し	東	明雅	62
秋の風	副島久美子	捌	34	七変化	文音	明雅・天留子 正江・よしえ	64
秋風	瀧川	雅代	36	ひこばえや	秋元	正江	66

クリスマス祝歌 キヤロル

伊勢

炎帝

編笠に

たふの峰

花霞

大仏へ

鶯の

桜桃忌

後の月

夕立

囀りの小径

月下美人

曼陀羅華

柿たわわ

幣辛夷

なんぢゃもんぢゃの花

大晦日

野分

文音 正江・貞子

文音 篤子・砂州男

独吟 利子

大窪 瑞枝捌

加藤 治子捌

加藤 道子捌

金久保淑子捌

蒲原志げ子捌

上月 淳子捌

米谷 貞子捌

近藤 守男捌

雑賀 遊捌

坂本 孝子捌

両吟 和子・美奈子

篠原 達子捌

膝おくり 元子・孝子
好敬

下鉢 清子捌

鈴木美奈子捌

副島久美子捌

鶴来る

芽ぶき

終戦忌

鳥の歌

影涼し

湯治宿

花の房

薄紅葉

西行や

時雨忌や

二月尽

梅の夜明け

白木槿

沈丁の香

落椿

半歌仙

ぬくめ酒

あとがき

瀧川 雅代捌

膝おくり 豊野草子・北風
杉江竹園子・尚堂

豊田 好敏捌

中島 啓世捌

中田あかり捌

両吟 淳子・あかり

両吟 万津子・きよみ

八角 澄子捌

原田 千町捌

東 郁子捌

佛洵 健悟捌

峯田 政志捌

村田 富美捌

本屋 良子捌

若松 隆一捌

木場田文夫捌

下鉢 清子

106

108

110

112

114

116

118

120

122

124

126

128

130

132

134

138

140

歌
仙
◇

木犀の

木犀の香り一都を染めにけり

運動会の狼火とどろに

昼の月針のはこびも楽しくて

舌でころがすバターキャンディ

烏賊釣りの帰れば犬のとびかかる

縁に集まるすてこの衆

吟^ウ釀酒下戸と上戸につきわけん

幼なじみは嫁して臆たけ

ほろ苦い青春時代の通過駅

ゴーリキ通り玻璃厚き窓

石の壁アンモナイトの歌を聴く

念仏僧の影も凍えて

皓々と後姿の冴ゆる月

躁で王様鬱で虫けら

開けゴマ百人の美女山分けに

カウチポテトで夢の旅人

花吹雪舞ひ上りたり中千本

雛の葛籠に埃うつすら

東 明雅 捌

東海福山秋荒原
野田田元間田
明利真和正宗千
雅昭空久江海町

江空久昭町空海久江久町雅昭空久江海町

ナオ
切れ長の嫂の目差し春の闇

涙壺には今日も一滴

理科室の自習時間の騒がしく

トーテムポールはたと倒れぬ

十戒を十の懺悔で帳消しに

爺が呆けたか婆が呆けたか

座敷わらし遠野の宿の足の音

青鬼灯のひそと下がりて

ゴルフはクラブ磨いて明日を待つ

月の鳥籠布かけてやり

なつかしや熱き思ひの土瓶蒸

エデンの林檎そしていちじく

ナウ
移ろひはスローバードピアニシモ

毛衣を着て自立する老い

かかさずに皇居一周靴軽く

単身赴任で初出社する

曙はことためにたし花明り

ならばマストにうらら日輪

平成二年十月七日 首尾

於 関口芭蕉庵

海 江 同 海 昭 江 町 海 雅 町 久 町 久 江 空 昭 雅 昭

大暑

暈から柱の立ちし大暑かな

しばしの夢を結ぶ陶枕

磯清水きらりきらりと聞こえて

歩巾ひろめにあゆむ町内

風呂敷に月の団子のひと包

糸瓜の先の土にとどける

陸橋^ウのほとりの空の雁の棹

浄閑寺で会ふ荷風知りびと

若かりし流浪の恋も今昔

カフェオーレの苦ききぬぎぬ

ピーとなる自動車電話の便不便

冬の月夜に這入る目鏡屋

雨降ると読み初めたる犯科帖

のつけから出る天竺^{がま}の墓

こはもての男の煙草けむたくて

入れ子の筐の最小のもの

花衣旅の鞆をかかへつつ

ひろがるばかりかげろふの水

膝送り

古館曹人

草間時彦

秋元正江

鈴木太彦

人彦

人彦

江郎

人彦

彦郎

江郎

彦郎

彦郎

人彦

郎彦

江郎

郎彦

彦郎

彦郎

ナオ
復活祭パレードは未だ現はれず

遠きところに滋賀の山々

おいでやすその気になりて銭とられ

骨董市に鉄兜出る

虹立ちて虹の向かふの夕べかな

なまりで
鵜立せぬ三人の仲

老いらくの手足荒れたる美女のゐて

捨てられるなら爺も共々

姿見が壁いっぱいにたてるなり

カレーライスをルームサービス

月今宵街の灯しも更けにける

ナウ
秋の蚊を打つ毛だらけの脛

選考に洩れし顔あるそぞろ寒

葉を出さぬ医師の貧しく

あたふたと牛ひきだして隣村

濡れてゐるなる啓蟄の土

アンダンテ・カンタービレ花の散る

針魚を盛りし藍染の皿

平成二年八月五日 首尾

於 俳句文学館

江 人 彦 郎 江 人 彦 郎 江 人 彦 郎 江 人 彦 郎 江 人 彦 郎

噴水

噴水の風にくづるる白さかな

蟬時雨して公園の午後

夏座敷新しき顔集りて

歳時記を繰り案ず七七

十日月生まれなむ児に語りかけ

衣被盛る竹の編笊

乃木祭地下足袋穿きのギャルもゐて

ロックギンギン彼の手拍子

此の頃は学生結婚大はやり

鳩は自由に空を羽搏き

東から西へ流るる人の群

揺椅子に編む毛糸ふかふか

北海の雪像照らす蒼い月

家業継ぐ友送る駅頭

定座には十五年棲む犬と爺

明治の時計ゆったりと鳴り

童話書く眸を上げて花仰ぐ

遍路姿の遠くなりゆき

市野沢弘子 捌

市野沢 弘子

下坂 元子

八角 澄子

副島 久美子

桑原 正敬

岩井 啓子

同

元

美

澄

美

元

啓

敬

澄

元

同

敬

春埃^{ホコ}つけたるままの旅鞆

何はさておき升で一杯

五千万保険をかけてゴルフ狂

「ごめん下さい」笑ふセールス

からげたる藍の浴衣の裾おろし

恋の梯で目の下に隈

会議中ひっきりなしの大欠伸

貴方お掃除わたしパソコン

泰山も鳴動するや地震しきり

鴉三羽がかあかあかあと

船頭の手早く料る裂鱈

月の出待ちて煙草くゆらし

秋^{ナウ}深し故郷の母へつづる文

人間ドック無事にすみしか

天気予報曇のち晴または雨

入学の子と道具揃へぬ

庭先に立てば再び花吹雪

畑打終へて帰る畦径

平成二年七月十八日 首尾

於 関口松声閣

敬 弘 啓 敬 澄 元 美 元 美 同 澄 敬 美 元 澄 啓 同 美

神の旅

神の旅杜の鳥の欲しいまま

落葉いろいろ舞ふ石畳

琴の音の遠くかすかに聞こえて

ココアにミルクゆっくりと溶く

月光にピエロの描く涙粒

柘榴たわわに活けし大瓶

ひそみ居し^ウ蓑虫垂るるぶらりと

ドミノ倒しに賭ける待ち人

彼の夜の項の黒子忘れかね

擬装結婚してもいいよと

奥さんがほしいと女流作家云ひ

悪がき去りてはだつ干草

漁り舟影くつきりと夏の月

ベイブリッジに著き地震痕

なかなかカメラの位置の定まらず

一杯機嫌ゆらりゆらりと

花吹雪巴に猫の寝ころびて

作務衣の僧の山独活を抜く

内田 麻子 捌

内田 麻子

山口 みづゑ

長谷 えみ子

高瀬 美保

瀬下 志津

塚本 泰子

吉沢 淑子

五味 蓉子

保 麻子

泰 保子

え 蓉子

上 淳子

保 子

え 蓉子

上 淳子

保 子

え 蓉子

保 子

ナホ

春霞母を訪ぬる新幹線

「おかへりなさい」膝の針置き

今日も又留守番電話丁重に

三寒四温毛皮持つひと

町々を呼んで行くなり厄払ひ

ラッシュアワーに手を握り合ふ

オフィスでは素知らぬ顔で苗字呼び

計算づくがいつか溺れる

ちちろ鳴く川の字に寝る二DK

壁壊されて西独の月

褐色の菩提子拾ふ公園に

ナウ
ほうらく焼に舌鼓打つ

ドラフトに夢破れたり元木君

まだ直らない爪を噛む癖

夕富士の端正写す山中湖

郷土自慢は若布飯蛸

遠き日に愛でし香りの花衣

砂場遊びに今日もうららか

平成元年十一月二十七日 首尾

於 房連庵

苑

翠

津 淳 淑 泰 津 淳 泰 淑 保 蓉 淑 え 津 泰 ゑ 蓉 子 淑

夏木立

梅田 利子 捌

街騒を鎮めて深し夏木立

短き影の灼くる舗道いし

もの言はず製本はげむ親子にて

顎ではさんだコードレスフォン

小漁港ほどほどの荷を揚ぐる月

西南西にかりがねの列

蓑虫ウの鳴き声求め旅ひとり

おみくじ引けばいつも末吉

好きな彼誘ふ彼とは別な彼

振られ上手とうそぶいてゐる

時勢には勝てず明治座取り壊し

育児休暇でストのパパ族

月凍ててスパイスに凝るキャセロール

暖炉の上に羚羊の首

村おこし家具職人の招かれて

飛驒の地酒を廻し飲みする

花篝どっとくづれる囃し唄

踏みつぶされし土堤の蒲公英

梅田 利子
大窪 瑞枝
山口 みづゑ
若松 隆一
東 郁子
本屋 良子

良枝 良枝 同良 同良 一 郁枝 同子

秋立つ

大窪 瑞枝 捌

秋立つや虎斑の猫の耳の禿

片割月の覗く雲の間

キスリング穂薄別けて行くならん

缶コーヒ―を廻し飲みする

白壁の匂ふ新駅開業し

忙しくあふぐ扇子いろいろ

端居して人の噂のきりもなく

艶っぽい眼は生れつきのな

貸ビデオ若きガルボを懐しみ

料金不足戻る郵便

この頃は忘れたふりの消費税

熱燗たのむ親父ギャル達

有明の玉砂利踏んで初詣

一陣の風さつと吹き抜け

モスクワに栄誉勝ち得しバイオリン

塩煎餅が何よりも好き

満開の花にそぞろの厨事

蜆、蛤、螺、鳥貝

大窪 瑞枝
副島 久美子
上 月 淳子
龍 川 雅代
中 川

久 哲 代 久 淳 哲 代 哲 淳 代 淳 久 哲

淳 久 哲

ナオ
虚子の忌に門弟こぞり句集編む

間違ひ多き俄ワープロ

アクセルをつい踏みこんで黄信号

根釧の道牛が寝そべる

玫瑰のはな咲く蔭に恋をつげ

甘いマスクでみごと逆玉

紫にまだ火照りをり昨夜の疵

黒き運河に投げる拳銃

サミットの果てて大使のお茶の会

角を揃へてリネン畳まれ

かくれんぼ月昇りても鬼は来ず

ナウ
残る螢の伝ふ芝草

故郷の梨仏壇にまづ供へ

過ぎし戦を告ぐる語り部

公民館催しものの回覧板

チャイムのひびき鳥曇るなり

峡の花浴びつつ下る瀬いくつ

若鮎を汲む堰堤の端

平成二年八月八日 首尾
於 俳句文学館

哲 代 淳 哲 同 久 代 哲 久 淳 久 瑞 久

濃りんだう

日照雨来て色増しにけり濃りんだう

庵の軒にかかる半月

小面の視野の人みな爽かに

ゐないゐないばあとあかぬ幼児

スナックの菓子も揃へる何でも屋

縮のシャツに紺のジーパン

薔薇垣に隠れて怠け通しけり^ウ

螢ともれば乳房重たし

枕経済ませて来たる息荒く

ダイバー時計黒くビニール

国立の北三軒の土地と家

署名運動義理で印押す

凍月に「失せ犬」のビラ貼り歩く

鍋焼の麩の紅のうづまき

ぼっと出の島倉千代子うまく真似

観光旅行巴里倫敦

自転車で古城を巡る花の屋

何処で貰った春の感冒

上月 淳子 捌

上月 淳子

坂本 孝子

川野 蓼子

大窪 瑞枝

山口 みづゑ

中川 哲ゑ

艸 孝枝

哲 孝枝

艸 孝枝

哲 孝枝

艸 孝枝

哲 孝枝

艸 孝枝

哲 孝枝

艸 孝枝

哲 孝枝

艸 孝枝

哲 孝枝

ナオ

妃殿下の笑みこぼれけり雛あられ

小さなカメラで隠し撮りする

飛行船影ゆつくりと紫蘇晶

野の嬉ひを襲ふ雷神

あかときの腕の中には鳥の羽

兎小屋には妻と子がゐる

エルメスにグッチシャネルと隙もなく

極道が来て迫る取り立て

まっつぐに行つてしだりへ曲りなせえ

石鹼箱に軽石に糠

月の差す棚のふくべに触れもして

舞茸焼いて呷るウォッカ

ナウ
秋鯖の紋様青き北ホテル

家具工房に残る職人

看守とは打ちとけざりし最後まで

芽生し鉢に白き苗札

レガッタの勝利のオール花万朶

山脈霞むなかに佇む

平成二年十月十日 首尾

於 白金台マンション

孝 枝 艸 孝 艸 孝 枝 哲 枝 孝 枝 孝 枝 艸 孝 枝 淳 哲

啓 蟄

啓蟄や小仏創る土ひねり

雀のこぼす庭の紅梅

宅急便初筍の届きゐて

証券マンのあはすアラーム

昼休みそぞろ歩きの群に月

空の奥処の秋沼に見え

^ウ含みみる出羽の新酒のほろほろと

彼がゐるから残る二次会

シースルー触るればびしゃり平手打

使はぬ鍵もまじる鍵束

仄暗き書斎の窓ははめころし

共産党が保守と呼ばれる

凍月に犬吠えかかる靴の音

湯気にむせつつ激辛の麺

地球儀の海に帆船浮べけり

ヴィーナスにキス送るネプチューン

逢引は年に一度の花の下

四十過ぎても春のざわめき

米谷 貞子 捌

米谷貞子

坂本孝子

市野沢弘子

若松隆一

大窪瑞枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

孝枝

ナオ

風車狂ったやうに廻りだす

雨に匂ひのこもる黄昏

旅鞆下着の下にシャブをつめ

じっと待ってる電話連絡

育ち良き坊ちゃん作家受賞して

仲居のはべる聞もそつなく

はじめてと聞いて愕然釣忍

青田道来て配る朝刊

カロリーの計算どこか間違へし

削り細りし鯉節かく

満月の爺の瘤取り鬼笑ふ

ナウ

卓にはらりと挿せる穂芒

立稽古後の袴を着流しに

火にかんかんと乾く大鼓おどな

神田川映る仕舞屋町工場

オートカメラの電池入れ替へ

茶箱にて花見の野点楽しまん

客にすすめる草餅の皿

平成二年三月七日 首尾

於 白金台マンション

弘 貞 枝 孝 枝 孝 一 孝 弘 枝 孝 一 孝 枝 弘 孝 一 枝

リラ冷え

リラ冷えや掌に包み持つブランディ

仔猫と座る革の長椅子

強東風の鉄塔鳴らす音ならん

誰も通らぬ街の信号

縫上げし秋の袷の藍ふかく

影絵遊びの月の縁側

木の実落つ池に真鯉のゆらめきぬ

見合釣書折目手擦れし

髯面は山が恋人放歌して

すこし遅れて来ると伝言

宅配便づザー押せども留守ばかり

梁の上滑るくちなは

月暑し聖書の講義延々と

煙草を採すポケットの中

幾千のチュルノブイリの後遺症

北極廻り旅の時差呆け

花の客迎ふる支度盆点前

春の踊に並ぶぼんぼり

雑賀遊捌

雑賀遊

坂本孝子

佛淵健悟

大窪瑞枝

米谷貞子

孝子

貞子

孝子

貞子

孝子

貞子

孝子

貞子

孝子

貞子

孝子

貞子

孝子

ナオ
算盤を電卓に替へ日の永き

だぶだぶモード今ふうにして

居留地の凹みの著き聲

雪降りさうに雉鳩の声

少女らのフィギュアスケートからやかに

温めてやる手先足先

下着脱ぐ闇にぱちりと静電気

釈迦の教へと別の極楽

栄転の伴の辞令神棚に

テレビ欄より開く新聞

うたたねにいつかまどかな夢の月

ナウ
菊の籬に立話する

薄味の実家好みの茸飯

長寿目出たき遊亀も土牛も

グライダー百回乗って得し免許

丸暗記する英語スピーチ

大使館窓の明りに花映えて

雀隠れの裏の原っぱ

平成二年四月十四日 首尾
於 マンション白金台

孝 悟 孝 同 枝 孝 貞 孝 貞 悟 枝 貞 悟 枝 悟 枝 遊 悟

鬼やんま

坂本 孝子 捌

少年の山河はろけし鬼やんま

残月高くわたる初風

貴腐葡萄新酒に苦み兆すらん

映画の筋はぱっとわすれる

お喋りな番のインコ貰ひけり

快走艇の船長の髯

ウ
転がれる香水壺のそのままに

小棲からげて急ぐお座敷

コンピューター習ふ檀那のお手当で

提琴の絃音立てて切れ

鎮魂に置かれし聖書革表紙

イラク紛争逃れ旅行者

ふぐ雑炊のれん出る顔月照らし

膏藥ふかくしみる蟬

書き上げし原稿の嵩揃へゐて

割り込み電話金の売り込み

花散りぬ李朝伝来井戸茶碗

辞して長閑けし会長の椅子

坂本 孝子
大窪 瑞枝
中川 哲
山口 みづゑ
山賀 健
雑賀 健
佛 遊

子 ゑ 枝 悟 遊 哲 ゑ 枝 遊 枝 哲 同 悟 遊

ナオ

猿曳の猿負ひ歩くメーデーに

文しきりなり故郷の母

桐箆筒夏の出水の跡著るく

麦藁帽をキヨスクで買ふ

業者等の縁断ち切つて新都庁

受付嬢の黙礼の謎

湯煙の中に抱けばなめらかな

悪い病も知らぬ間の恋

叢にひそひそひそと羅漢私語

鉄棒錆びし校庭の隅

写真帳繰ればセピアに月明り

ナウ

ホップ満載トラックを駆る

芋盛りて稽古たけなは村芝居

昔鳴らした爺の裏声

掃除機は働き過ぎて草臥れて

曇りのち晴れ穏やかな午後

育みし花に溢るる試験林

雛納めんと被せる薄様

平成二年八月十一日 首尾

於 マンション白金台

哲 悟 遊 同 哲 悟 子 枝 遊 枝 悟 枝 遊 子 枝 遊 子

秋 祭

亜麻色に暮れて十番秋祭

櫓太鼓に新涼の月

枝豆を籠にたつぷり茹であげて

算数国語せかす宿題

沓脱ぎに野良猫いつもかたまれる

バルキーセーター手首すっぽり

^ウ宗谷沖砕氷船に乗り組みぬ

鷗をみれば思ひ出すひと

軟らかな飯が好みと炊いてくれ

だらだら坂を降りきった家

配当の目減りに布施も薄くなり

野外映画にこどもいっぱい

半月のプールサイドに佇みて

アラビアの夏戦争の夏

玻璃越しの王の木乃伊の身じろぐや

庶務係消す古き伝言

花筵ひろげ酒樽担ぎ込み

去らぬ姫蛇傘持ちて追ふ

式田 和子 捌

式田 和子

佛 淵 健 悟

中 川 哲

穴 澤 篤 子

雑 賀 遊

鈴 木 美奈子

船 本 志 紅

遊

篤

哲

悟

篤

紅

大 隅 笑

人

篤

和

哲 悟

ナオ

命名の紙も眩しき春障子

家族旅行にデラックスバス

雲早し山の容の変らざる

嫁の病気は気の病なり

さはりたいたさはらせたいの身ハツ口

離れられないクンパルシート

左右からレザー光線ぱっぱと

消防士でも迷ふ露地裏

厨房に今や男も入るてふ

織部信楽唐津常滑

白い月残して夜の明けてゆく

ナウ

こんなところにしめぢ見つけて

ハロウインの門に基金の箱を持ち

エコロジストが鯨討論

お茶運ぶからくり人形ぜんまいで

匠の菓子を配り物にし

満開の花に颯爽武豊

耕すひとのちよっと一服

平成二年八月二十四日 首尾

於 麻布十番 ブルーペティユ

早 早
坂 坂
方

美 和 哲 悟 美 遊 哲 遊 悟 紅 篤 遊 篤 子 浩 篤 遊 紅

忙中の夏

忙中の夏を京橋あたりかな

新茶のびらの揺れる軒先

キャンパスの絵具の色の極まりて

靴を磨いて過す週末

見上ぐれば雲の絶え間に月浮かび

邯鄲の音を友と聞きゐる

秋^ウ闌けて静まりかへる御師の家

ワンダーフォーゲル広げたる地図

七宝のロケット彼の写真秘め

受話器にちゅっと甘きくちづけ

朔太郎の青猫膝をかかへ読む

素人離れの株と麻雀

枯れ果てし河原を濡らす月の光

百鬼夜行に出会ふ凍て道

マツカリをキムチ肴に酌み交し

大統領をやっと送って

子の頬に咲き満ちし花耀へる

風琴ひびく暮れかねる頃

下鉢 清子 捌

下鉢 清子

雑賀 遊

下坂 元子

大窪 瑞枝

杉江 杉亭

遊亭

遊枝

遊枝

元枝

清元

遊元

遊元

遊枝

元枝

遊枝

元枝

遊枝

元枝

揚雲雀落雲雀とて友雲雀^{ナオ}

ドームはるかに望むフィレンツェ

伝来のレシビノートを娘にゆづり

小紀^{こき}老礼^{らうれい}と仇名呼び合ひ

自転車で恋の坂道かけおりて

抱擁あつく草茂る中

銀鱗の光りて鮎のまた釣れぬ

肩パットほど肩書を持ち

心労の重なる果の脱毛症

同窓会を取りしきる奴

たらちねの有明月の夢に現れ

露^{ナウ}くさ描きし懷紙取り出す

ひいやりと伊万里の壺の藍の肌

馬身じろがぬ蹄鉄屋前

泣き笑ひ喜劇人生幕を閉ぢ

ジョギングの背に雨の霽れゆく

パラボラのぬうと覗きし花の山

紙飛行機を飛ばす野遊び

平成二年五月三十日 首尾

於 京橋区民館

亭 清 元 亭 元 枝 遊 同 枝 元 清 遊 枝 遊 亭 遊 元 亭

ずぼんぼ

「ずぼんぼ」の由来など聞き初懐紙

艸の庵に集ふ人日

手を打てば鯉悠々と泳ぎきて

思ひの外の高値落札

複製の名画に淡き望くだり

秋の夜長を微醺低唱

女房にせかされてする冬仕度^ウ

化粧入念娘外出

横浜のベイブリッジの抱擁場

開運の鈴ポシェットにつけ

柚子湯よりすっぱんぼんの嬰渡^{ぢや}し

鍋の用意の整ひし月

胸算用すれど儂なき円下落

「知足」の文字を噛みしめてみる

禅問答アメリカ人とパナマ人

甘辛煎餅まぜし一折

見上ぐれば猿が見おろす花の梢^{えだ}

新入社員手持無沙汰で

杉内 徒司 捌

下 鉢 清 子

東 郁 子

二 村 文 人

山 田 和 久

中 川 哲

今 宮 水 壺

福 井 隆 秀

郁 哲

清 哲

同 清

郁 同

司 哲

杉 内 徒

人 哲

同 哲

郁 同

清 郁

清 郁

ナオ

ワープロのあらぬ方打つ目借時

電信柱の残る廃駅

千年の栄枯を秘めて光堂

三の段のみよく出来し九九

夏見舞はめられて靴揃へおき

浴衣の帯の赤き結び目

細巻の伊達の蓑も愛らしく

惚れた亭主は小原庄助

トラックの一台ですむ大道具

校舎の裏に栖みつきし犬

月の出の尾越の鴨を見送りし

菜虫芋虫はじく割箸

ナウ

秋祭囃し掛声賑やかに

どっこいしょっと伸ばす足腰

アトラスをまるめこんだるヘラクレス

輸入直売ベルリンの壁

画架立ててひねもす飽かぬ花の頃

静かな野辺に霜くすべ焚く

平成二年一月七日 首尾

於 関口芭蕉庵

久 司 哲 壺 哲 郁 同 清 人 壺 郁 清 久 人 同 清 哲 壺

秋の風

副島久美子 捌

京橋や行き交ふ肩に秋の風

名月を待ち集ふ小座敷

果物盛棚の苦瓜笑み割れて

急き立てられし原稿を書く

幼子の曲乗り上手一輪車

蝉鳴き始む校庭の隅

姫^ウ鱒にアイヌ伝承聞くあはれ

金のクルスを肌^ウに掛けをり

やうやくに叶ひし愛の祝されし

空鉄砲に逃げぬ野鴉

網の目をくぐり慣れたる密輪団

地下の酒場でスコッチを舐め

寒き月ビルの林の上に出で

たうたうたらり能始めなり

若者の言葉さっぱり意味不明

私は私猫は猫流

僧に似て僧にはあらず花の旅

畑打の人遠く小さく

副島久美子

瀧川雅代

坂本孝子

馬場彬風

八角澄子

市野沢弘

澄子

孝弘

代同

孝風

風孝

孝弘

代風

風弘

澄風

澄風

澄風

ナオ

蝶渡る水満々のダムサイト

発破の刻をきざむ短針

鳴り続く「いのちの電話」受けそびれ

家政婦雇ひ励むお仕事

皺かくし子供かくしてモデル業

浮名三千後悔はなし

さみだれに彼の人恋ひし夢恋ひし

パイナップルのちよつと酸っぱく

消費税どこまで見直し効くのやら

定期で通ふ父の病床

雲間より洩るる月影仰ぎ見る

運動会の用意万端

ナウ

唐黍の焦げ目程よき香ばしさ

友に誘はれロスの裏街

財をなし名を得て吾は身も軽く

紐付けしまま風船の飛ぶ

花盛り記念植樹の若木なる

のどかに奏ぶ銀のフルート

平成元年九月二十日 首尾

於 京橋区民会館

弘孝代 孝澄代 孝代 孝代 孝澄 孝風 孝風 弘同久風

秋風

碑^オや秋風の生む山の音

月見団子を腰にさげゆく

かりんの実籃胎に盛り賞づるらん

絞りと刺繡Tシャツの柄

ギヤマンの煙管を買って吹いてみる

みどり蜘蛛追ひつまみあげる子

隅^ウ田川新大橋にほど近く

「園女の世界」受賞うれしき

陰になり日向となりて妻を立て

猫と違って撫でてやるなり

本性をむき出しイラク暴走す

メッカの壁に何を祈らむ

中天の月仰ぎつつ掃納

昆布たっぷり湯豆腐の鍋

せがまれしジグソーパズルつながらず

ほろほろ鳥に声をかけをり

我が庭に植ゑてはじまる花行脚

若狭あたりのよな曇りして

瀧川 雅代 捌

矢島房利

秋元正江

下坂元子

梅田利子

山崎一恵

八角澄子

瀧川雅代

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

利同江恵

ナオ

常節のひたと貼りつく生簀籠

自販機故障ゆすつても出ず

ダイエツトききめありしかなかりしか

ゴリラがじつとひとを眺める

噴水に銀の妖精踊りつつ

古城に弾ける若き楽聖

結び文わざと落して拾はせむ

奪ひ取るのよそんな好きなら

海鳴りの遠く聞ゆる岬にて

画架をしまひて老のくりごと

初月夜詩心おのづとあふれ来ぬ

ナウ

蟻穴に入る野佛の裾

どぶろくの酔に無頼の地下酒場

戦後育ちが六割を占め

いっせいにスクランブルの交叉点

電話ボックス待たされてゐる

花の雨胴着かつぎて女の子

今年も届く鯛の浜焼

平成二年八月二十日 首尾

於 深川芭蕉記念館

澄江澄恵元澄江恵同元江恵江澄恵江恵代元

あぢさゐ

中島 啓世 捌

あぢさゐは浅き緑や古稀祝

めでたき席に通ふ涼風

海までを駆け比べする子等のゐて

去年のスカート少し窮屈

月光にぬれて輝く庭の椅子

とうもろこしは甘く愛しと

色鳥の舞ひ来て筆を休めたり

肩に廻したその手ぬくもり

熱き恋電話手紙と追ひかけて

郵便局は大入満員

テレビにてダイヤ売ります梅干も

十二単衣は重く裾引く

弥撒帰り照らす細道冬の月

フロントグラス氷雨打つなり

親猿に甘える子猿毛づくろひ

四迷に語るからゆきの墓

喜の寿なる花のよそほひ捌の師

白魚舟のゆったりとゆく

中島 啓世
桜井 千代
藤井 弘美
牧岡 歌子
藤田 克子
橋本 満喜
井上 哲也
山本 八乃子

美 喜 美 喜 克 喜 也 美 八 也 喜 美

ナオ

土手走る二輪車見てる葱坊主

あげまんさげまん男意地なし

宝籤当たると信じ又買ひて

夢の中まで大声をあげ

呂太夫の弁慶格子夏祭

重り落ちし守宮^{やもり}白腹

きらきらとせまる瞳の一途なる

シャワーの音の尚もはげしく

モーニング珈琲たのむ日の高さ

厚く切りたる福屋加寿丁羅

月の暈志野の水指掌に重く

ナウ

紅葉踏みゆく旅人の群

木の実落つ野兎耳を動かして

マティーニ飲んで昔偲ばん

路地奥のギターの音のかそやかに

二十四時間本屋開店

花万朶雪洞の灯のゆらめきて

踊り続けん春の曙

平成二年六月二十日 首尾
於 藤が谷連句会

八喜歌美喜也八克同歌喜美代美同克八也喜歌美喜八也

空梅雨

空梅雨や犬の嗅ぎゆく草埃
 夏風とほす百姓の土間
 万葉を誦ずる声の涼しくて
 うごかぬ時計持ちあるく人
 燦然と月光流す大河なり
 コンピュータに秋は深まる
 里の日にたぐり寄せたる藪からし
 稿に朱を入れ濡れ縁に佇つ
 おさらひのピアノの音のじれったさ
 人の影追ふ恋のはじまり
 奥座敷京人形のもらひ泣き
 二上山に衣忘れて
 地藏尊御目は風化山襖
 ぴしゃりと閉めて揺れる格子戸
 間をとりて一巡したる冬の月
 お燭をつける地酒仙醸
 遊歩道トウテンポールに触るる花
 親子のきぎす遠くのどかに

根津 芙紗 捌

平 出 づる子
 根 津 芙 紗
 戸 田 恵 美 子
 倉 沢 友 子
 堀 田 澄 子
 笠 松 道 代
 友 澄 道 恵 澄 紗 友 道 澄 道
 道 澄 道

ナオ

舞ひ納む空眼を見る利久の忌

竿指しそこねた舟の行く末

日韓の過去の不幸を清算し

衣鉢を継いで長い道程

蛭放ちおとぎの国も蚊張の中

湯ぼてりさます冷しオシボリ

塗り下駄の音は遠のき気にかかり

五十を過ぎて恋句曼陀羅

靴ずれに肩を貸したる旧街道

工事現場にうづたかき砂

薄月に浮世絵の富士海に浮き

針の手を止め虫の声聞く

秋の空泡立つコーヒー吹いて飲む

ドイツ統一歴史ひとこま

ペットにも成人病が流行るとか

くぐりて拝む鳥居身の丈

傘ふれてしづくを散らす花の雨

おたまじゃくしにつきまとはぐ

平成二年九月末日 首尾

於 からむし庵

道 恵 澄 紗 友 澄 つ 恵 道 友 つ 澄 道 恵 紗 道 友 恵

犬 夢

犬夢や文学館へ細き道

ふと立ちどまり秋の声聴く

月皎皎水夫の髪を吹かれるて

パイプくゆらす揺り椅子の人

額の絵の掛け替へられてリフレッシュ

氷下魚四五匹縄に吊せる

海獺帽耳まで下ろし北の駅

初恋の彼知らぬ顔して

披露宴招待状の刷りあがり

自動車電話雑音で切れ

あれこれと新閣僚の品定め

汗手貫して座る老僧

戸袋を百足出て見る宵の月

根津八重垣町酒の甚八

スカイライナー大きな荷物無遠慮に

バリラックスで漫画本読む

豎琴の置かれしままに花曇り

話しなかに不意の春雷

原田 千町 捌

原田 千町

秋元 正江

上月 淳子

大窪 瑞枝

副島 久美子

中川 哲

枝 美

江 枝

枝 淳

江 枝

枝 哲

枝 淳

江 枝

枝 哲

枝 淳

江 美

江 哲

哲 江

ナオ

今年から「緑の日」よと教へられ

発毛剤のデータいんちき

自惚れ鏡高値をつける古物商

木乃伊の指輪の複製をはめ

次ぎ次ぎと脱ぎて年増の迫り来る

凍結される受精卵増え

神様もしっかりしゃんとなさりませ

モスクワで買ふ西側の菓子

保育所の碧い瞳の児の愛らしく

遠山並みに鐘の音澄む

鳥影を映して昇る月仰ぎ

芸術祭に落語入賞

ナウ

冬の蚤所きらはず刺しまくる

第二の人生主夫で働く

ワープロはライトタッチで消去され

記念切手にできる行列

まほろばの今を盛りの花に会ふ

夢みるごとくぬくもれる石

平成元年八月九日 首尾

於 俳句文学館

江 淳 哲 江 淳 美 枝 江 淳 美 枝 江 淳 美 枝 江 淳 哲 江 淳

水澄むや

水澄むや鯉の彩濃き神田川
木犀の香に歩みとどむる
月高し四阿に酔醒ましゐて
編集記者の仕事終へたり
吸ひ殻のいつの間にやら山をなす
釣忍より雫こぼるる
父の日に父の目で読むツルゲネフ
思ひ初めしは年上の女
きのふ待ちけふは待たせて喫茶店
軒に吊せるカナリヤの籠
朝鮮も一つの国になるかしら
返事に望みかけて寄せ鍋
冬ざるる月の河原に細き影
托鉢に出る若き旅僧
雑沓の流れの変はるひとところ
どぜう掬ひのあとはランバダ
志果して帰る花の駅
復活祭に普段着でゆく

東
郁子
捌

[illegible]

ナオ

うららかに呉越同舟夢の中

カイゼル髭を子が撫でてゐる

自衛官国を出る時や丸腰と

株は値下り円は値上り

夏休み今年も布畦予約済み

女房の留守は気儘自堕落

白髪染まむしドリンク取揃へ

木枯すさぶ安達太良の山

鬼婆の肝盗りしてふ塚寒し

地上げ屋が来てはじく算盤

寄席帰り賑ふ路地に仰ぐ月

つづれさせさせ蟋蟀が鳴く

秋深くセピアに褪せし写真帖

中学同期子規の養子と

無聊の日講談全集読み耽り

玻璃戸の外に春の蚊柱

花万朶高く聳ゆる朱の鳥居

リュックとりどり遠足の列

平成二年十月七日 首尾

於 関口芭蕉庵

壺 同 司 し 啓 司 壺 し 司 啓 壺 人 啓 司 人 同 壺 人 同 壺 し

ナ
オ
ゴールデンウィーク疲れ夢うつら

ひとつ不思議な塔のそびゆる

家伝なる小柴胡湯しょうさいことう分けてやり

人質頼るイラク統領

羊飼ひ羊を連れてクリスマス

指輪こっそりはめて恋仲

片肌を脱がせお太鼓ゆるませて

貢ぐたのしさ知った青年

前座から二枚目になり閑になり

鰯雲浮く夕やけの空

グリルには華岳の月の模写ありて

タイムレコード押してうそ寒

ナ
ウ
行き戻るべったら市の雑踏に

ばらばらいふは雨か木の葉か

三越の社長の好きなアールデコ

白魚汁で軽くひとくち

ふるさとの母に知らせる花便り

外国人とくにびとのまじる野遊

平成二年八月二十九日 首尾
於 信濃町・金属基金会館

保 秀 哲 麻 和 保 和 哲 保 哲 麻 和 麻 保 秀 和 麻 哲

十二単

つゆ寒や十二単のあでやかさ

並びて見入る濠の輕鳧

引込線雜草ばかり伸びてゐて

トランペットを吹ける少年

待兼の想ひとどきて月昇る

新綿の籠置いてある土間

赤チン^ウは運動会の勲章で

髪をなびかせバイク相乗り

のどみせて飲みぶりのいい妻の酒

座布団のへり猫がじゃれつき

道元の雪沓しのぶ永平寺

干菜たばねて月のいよいよ

カラオケのマイク離さず終電車

しわくちやの札のぞくポケット

やじろべえ右に左に揺れもせず

あなたはあなたわたしはわたし

橋渡りたどり着きたる花の宿

おぼろに匂ふ墨の幽かに

三木 弘喜 捌

三 木 弘 喜

二 宮 操 一

野 口 稔

秋 元 正 稔

山 田 清 七

江 七

一 七

稔

同 七

江 七

稔

江 同

稔

同 一

江 一

同 一

江 一

同 一

ナオ

染卵そつとてわたすフィアンセ

つい見てしまふミニのししむら

保育園おててつないでごあいさつ

中東帰り何も持たずに

いかづちの筑波山麓かけめぐる

五十歩百歩ボケもころりも

墓石屋と坊主呑んでる縄のれん

落語作家も辞書と格闘

ビルばかり大川端を埋めつくし

向ふ三軒親子三代

待宵にカバンひとつの都落ち

赤げらの穴触れてみるなり

秋野原篠のささやき聞こえきて

アール・グレイの紅茶濃いめに

たにまちも株暴落で浮かぬ顔

いかめしき髭風船を売る

花の香に雄蝶雌蝶の巴舞ひ

机にもたれいつか春眠

平成二年七月二日 起首

平成二年十一月六日 満尾

於 朝日カルチャー 四階

同 一 七 一 江 稔 江 稔 一 七 一 江 稔 一 喜 稔

駒繋ぎ

紅殻の門をくぐれば駒繋ぎ

黙のままにて探す片陰

藤椅子に母子の会話やさしくて

チーズケーキに薄いコーヒ

三ヶ月を隠し現し雲の過ぎ

硯の藍を持てば冷やか

宮家よりご代拝あり御遷宮

雲鶴文様ローブデコルテ

マリーナの恋のシートは順を待ち

ひもになりたい男ばかり

燠製器燠す腸詰香りよく

粉雪の舞ふ東欧の街

寒月を窓越しに見る旅の空

永年勤続共に老妻

小売屋の足元揺らす大店法

寸のつまった顔の猫居り

短冊を逆さまに書く花の酔

春雷避けて入る地下道

本屋 良子 捌

本屋 良子

式田 和子

金久保 淑子

豊田 好敏

田村 満子

蒲原 志げ子

小原 正子

加藤 道子

杉江 杉亭

和

淑

正

亭

和

淑

道

和

敏

ナオ
童とひばり鳴く空あこがれて

シャガールが舞ひモネが微笑む
きざな奴コードレスフォン人前で
もつと聞きたい喋々喃々

解けやすいやうに結んだ帯が解け
五百羅漢に雨の冷たく

朝練のマラソンの列長々と

まとめ買ひする鉄骨飲料

限定の古書の出所わが恩師

月球儀あり地球儀もあり

のぼり来る鮭はいづこに遊びしや

ナウ
芸術祭に帮間の芸

申歳の器用貧乏八十年

卓上ポットピッピッと鳴る

右左ちよつと違つて血圧計

おすそ分けする蕨たちの芽

掘り進む古代住居址花吹雪

すがるを追ひて走る若者

平成二年七月二十日 首尾

於 鎌倉おうめ様

正和亭 志満道 淑同 志敏和 敏満道 志良亭

十三夜

十三夜月餅供へしこともあり

離れの軒に聞きし爽籟

隠し田の稲穂の実り豊かにて

首重たげに眠る野良犬

ワイプロに不平言ひつつ藍浴衣

ゲートボールは日の出待たずに

鉄柵が潮に錆びたる漁師町

七つ釦に憧れしころ

許嫁なんぞ捨てよと迫られて

どっちつかずはA型の常

ベトナム語わからぬベトナム人が着き

でんと盛られるおにぎりの皿

心疾に酒を断ちたる冬の月

枯蔦まとひひっそりと木々

借景と問へば「なになに俺の山」

主に似たる鬼瓦なり

いかばかり古寺の昔の花吹雪

宙にとまりてうなる蜜蜂

八木 聖子 捌

月山 富佐子

矢崎 藍

三岡 鑽次

八木 聖子

阿部 都美子

次

藍

美

次

聖

美

聖

次

藍

美

佐

同

藍

ナオ

腕ふるふ女性大臣世はのどか

努力の末のさりげない笑み

満点の答案用紙見て飽きず

ケーキの箱の凝ったデザイン

脱サラの店を開ければ並ぶ客

しづしづ通る夏の葬列

現し身を染むる夕陽に肩寄せて

情事のあとはいつもけだるく

ゴージャスでトレンドィーが好きなあたしなの

夫の嘆きを知るよしもがな

けもの道産婆の駆ける月の秋

厨の籠にぬかごころころ

到来の松茸飯を二杯ずつ

寿命延びたと手を叩く母

念入りな化粧で皺がなほ目立ち

無事故無違反堅く蓄財

花今宵今太閤が座敷買ふ

春灯映すさざ波の岸

柿
本
時

美佐代 美代 聖代 同代 藍代 美代 聖次 美佐 次代 藍代

平成元年九月十一日 首尾
於 棒の手会館

花三千

空に満ち白木蓮の花三千

東風の匂ひをかいでゐる猫

潮干狩子らにぎやかな声たてて

映画もかかる村のイベント

望の月手づくりだんご召されませ

こほろぎのふと止みし濡れ縁

秋澄^ウんで家紋くつきり大暖簾

越前行けば出会ひやさしき

おみくじを小枝に結ぶ細き指

間歇泉のごとき恋情

長堤を單車轟音ひとしきり

この世はとかく誇大広告

見上ぐればビルひそやかに夏の月

祭帰りの浴衣OL

折鶴を無心に折りて母病めり

柱時計の振子動かぬ

学友と久濶を叙す花の下

草餅分けし故郷の土手

矢崎

藍 捌

後藤 志津枝

八木 聖子

月山 富佐子

三岡 鎖次

加藤 治子

小園 好子

由川 慶子

月山 壹子

好子

聖子

慶子

石黒 正子

稲垣 渥子

岡本 道子

渥枝

枝

壹

次

ナオ
ブランドのスニーカー履き遍路づれ

芭蕉ブームのあとのむなしさ

待ちかねし本絶版のしらせくる

さらさらさら雪はみぞれに

寒林のチェンバロの音はいづこより

ステンドグラス仰ぐ尼僧衣

純愛はすべてを越えて国境線

眼もと涼しき人に抱かれむ

あけがたの夢一面の罌粟の中

月うっすらと鮭いろの雲

軽やかに犬と散歩の秋めきて

とれし枝豆塩加減佳く

ナウ
流し合ふ背なにしみじみ老いの翳

孫のあやつるおもちゃハイテク

ゆっくりと地球温暖すすむとか

蛇穴を出る裏の石垣

唐破風の波打つ街に惜しむ花

灘の日永の酒に酔ふらむ

平成二年三月二十日 首尾
於 棒の手会館

執

正 聖 好 藍 聖 慶 次 道 聖 藍 道 壹 富 渥 治 正 藍 筆

花辛夷

遥かなる雲の巴や花辛夷

北窓開く丘のマンション

空缶に兎の持ち来るは蛸蚪ならん

「お帰りなさい」出迎へる声

篝目のさやけき庭に月の光

つかける下駄既に露けく

ロザリオ祭うなじも細く祈りゐて

人なつかしく雀より来る

はからずも熱き思ひの文たまひ

よき卦のままにしたるあひびき

念願のゴルフコンペに優勝し

甘き香を盛るウェルカムフルーツ

弓張の月の斜めに網戸越

女性大臣消えてはかなき

何処よりか呪の声の聞え来て

チョコレート爆弾パチパチと鳴り

連れもよし酒もほどよし花の宴

面を染める春の夕焼け

山口みづゑ 捌

山口みづゑ

氏原正雄

佛淵健悟

上月淳子

雑賀

遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子 遊雄子

ナオ
佐保姫の袖たをやかにひるがへし

祖父の茶室の棟上もすみ

年金をねらって世辞のどら息子

ホラービデオをいっぱい溜め

同じ日に香典返し内祝

汐の香りを運ぶ寒海苔

ぼっと出の靴もバッグもイタリアン

電車の中でマニキュアをする

三度目の妻は娘こよりも若くして

叩いてだめなら撫でてみなさい

待受けし月ほのぼのと登り来ぬ

ナウ
炬燵恋しと猫を侍らせ

榛ナウの木のとっぺん発止と鷓鴣る

角すりへりし道標建つ

後つぎは未だ有髪の尼の寺

あたふたと去る観光の客

倫敦のメーデー雨の花に逢ひ

黄蝶の後を追へる白蝶

平成二年三月七日 首尾

於 白金台マンション

子 悟 子 遊 雄 遊 雄 遊 同 子 遊 悟 子 悟 子

蔓くさの

蔓くさの実の付きそめし垣根かな

鈴虫の音に昇る夕月

からすみを遠火に軽く炙りゐて

おはじき遊び余念なき子ら

丘越せば別の海あり夏の家

クーラーもなきボンネットバス

国訛^ウとび交ひおかし座談会

はにかむ癖の今もそのまま

棄てるにはやはり未練のラブレター

夢の中なる熱き抱擁

苔むせる橋の畔の塞の神

もぐらの穴を堀ってゐる犬

凍月を窓に仰ぎつショパン弾く

勅題菓子に薄茶差し出す

窯だしの壺の貫入あざやかに

等高線がうねる山地図

和綴本開けば花の散りかかる

日だまりに置く頬白の籠

山崎 一恵 捌

山崎 一恵

八角 澄子

下坂 元子

瀧川 雅代

梅田 利子

元子

同

雅

利

澄

元

雅

同

利

澄

雅

元

澄

ナオ

春飛魚の競り声たかし魚市場

招き看板ならぶ歌舞伎座

骨寄せの岩藤宙に踊りつつ

ちよつと待ってよ派兵号令

盤上の大勢いまだ定まらず

冷酒あふって経とちるなり

恋去りしいたで重なる心気症

金めあてでも男ならよし

ラマーズで夫の立ち会ふ幼妻

電話のベルが遠くきこゆる

敦煌の縹の空に浮ぶ月

ナウ

友を送れば風の身にしむ

秋場所の草履つかかけ大髻

馬刺自慢の縄のれん下げ

湯気の中覚えたてなるおわら節

何を描きても淡きデッサン

学校の花の記念樹連なりぬ

昔話に長閑なる午后

平成二年九月三日 首尾

於 山崎宅

同 利 元 利 雅 利 元 雅 澄 雅 利 澄 元 澄 元 澄 惠 雅

二十韻
◇

むし暑し

むし暑しちやばは真昼にとき上ぐる

トマトをもぎて丸かじる子ら

燈台守魚類図鑑を取り出して

ひとり暮らしもややに馴れつつ

浴槽に伸ばす掌居待月^ッ

酒温めん待つ人のため

秋拾ゆるやかに着てしのび逢ひ

ヒルトンホテル二十八階

展観の五百羅漢は泣き笑ひ

黒猫見れば偏頭痛出る

東

明雅 捌

楠見八重子

久保田庸子

桑原 正敬

須田 智恵

敬

東 明雅

恵

桜井 八重

同

庸

目貼^ナりして浅間山麓住み続け

鬼押し出しにかかる寒月

夢のごと会ひたる人の面影も

盗み盗まれ若きO・L

お目当ての旅は東独ルーマニア

いつとは知らず煙草一箱

老人^{ナウ}が探す死場所砂嵐

初蝶ふはり足許に舞ふ

紅しだればつぼつ花も咲き初めて

平安神宮春の賑ひ

平成二年七月八日

於 光ヶ丘近隣センター

惠 庸 同 敬 八 雅 八 惠 八 庸

七変化

隠れ家や咲き放題の七変化

水鶏の叩くゆるき裏木戸

シチュー鍋煮え加減よき蓋とりて

子供好みにたのむ味付け

阿夫利嶺^ウの影くつきりと今日の月

関八州をめぐる爽籟

初恋の女^{ひと}によく似た菊人形

ＬＬ^{サイズ}寸法の妻の拗ねやう

逆玉とうわさをされる身の辛さ

入浴剤のはやるこの頃

文音

東 明雅

桜井天留子

秋元 正江

若尾よしえ

え

天

雅

え

江

雅

天

ナオ
曠原に狐遠啼く月の夜

クロイツェルソナタ由紀夫忌に弾く

モーゼルのワインの白き酔心地

船揺るるまま抱き合ひしまま

約束の見てはならない人覗き

蜀伝来の錦一切れ

ナウ
追分の辻にはほえむ道祖神

結んでひらく輪にも陽炎

釉薬をかける大皿花明り

土産にもらふ鯛の浜焼

平成二年六月五日 起首

平成二年十月十六日 満尾

え 江 天 雅 え 江 天 雅 江 え

ひこばえや

秋元 正江 捌

ひこばえや西新宿のあたらしき

上衣片手に春闌くる頃

栄螺沸き話のはずむ膳ならむ

消さぬテレビを犬が見てゐる

月^ッ面に神の名のつくクレーター

にきびづらには糸瓜水あり

歩哨兵待つは恋文雁渡る

裏道つたふ難民の群

ジプシーにまじりて踊るフラメンコ

マジョルカ壺に大き薔薇挿し

秋元 正江

上月 淳子

金久保淑子

市野沢弘子

原田 千町

蒲原志げ子

佛淵 健悟

杉内 徒司

瀧川 雅代

中島 啓世

ナ
日覆のはてり残して畳まれぬ

朽ちし釣具屋堀にゆらゆら

二昔過ぎて腕白父となり

雪山にまた逢ひし嬉しさ

酌み交す寝酒の果の歪む月

三尸の虫のついと抜け出す

ナ
いつの間に寺宝となりし石瓦

村起し策知恵をしぼって

SLをねらふカメラも花の蔭

弥生の空をあかず眺める

平成二年四月十一日 起首

平成二年九月十二日 満尾

於 新宿朝日カルチャー教室

式田 和子

八角 澄子

岩井 啓子

野瀬 潤子

東 明雅

篠原 達子

橘 文子

梅田 利子

百武 冬乃

山崎 一恵

クリスマス祝歌^{キヤロル}

文
音

クリスマス祝歌^{キヤロル}魔法のタクト振り

影絵の如く降り積る雪

まろびつつ寒犬を追ふ子の消えて

とり散らかせし書斎片付け

合^ウはせたる帯は山の端のぞく月

さねかづらの実赫き不退寺

さはやかな彼の横顔フィアンセ

アルバム繰ればわだつみの声

涛の間に空瓶のうく九十九里

焼印押せる宿の庭下駄

秋元 正江

米谷 貞子

ナ
オ
こつくりと生麴ひろうす煮含めん

夏負けだけと言ひきれぬふし

うかれ女とはやされ月の火とり虫

奪ひし愛の修羅のあけくれ

川風に吹かれてゐたりベレー帽

河西回廊ひとり旅ゆく

ナ
ウ
値上げせる上に重たき消費税

うららに並ぶ酒は平成

花の宴仁和加踊りの賑やかに

巣箱のもとで憩ふ連衆

平成元年五月十七日 満尾

江 貞

伊勢

文音

春は伊勢おもへば朝の一羽消ゆ

苦屋出づれば頬に貝寄風

野遊びの籠よりみどりあふれるて

バスの窓から通学の子等

着^ウぶくれて歩くを昼の月蹤き来

詮なき恋と文に書けども

観劇の妻の肩越し目で合図

ことばの継穂友の講釈

雨粒のあつと言ふ間に潦

石垣ばかり城跡に立つ

穴澤 篤子

古川砂洲男

男子

子

男

子

男

子

男

北^{ナホ}の蚊の刺す針細き旅の果

家伝の薬万病に効く

ししおどし鳴れば鳴ったと四畳半

菊枕には夫の寢息

満月に脱ぎし衣の藍匂ふ

自慢の酒はふるさとの味

舟着^{ナウ}場さらさらさらと水の音

新入社員辞儀の低くて

花さかる西へといそぐ蓮如みち

空の青さにふらここのゆれ

平成二年二月二十二日 首

平成二年七月七日 尾

子 男 子 男 子 男 子 男

炎 帝

独吟

梅田 利子

炎帝も結団祝し給ひけり

先づニイハオ爾好と交はす片陰

絹の道ボブラ並樹のそよぎゐて

紙巻き煙草手つきあざやか

ウナム
胡餅食めば姮娥昇りぬ破風の上

帰燕の声を石に残せり

白檀の忘れ扇は誰ならむ

頬ずりしたき混血の娘ら

貴妃の軸飾り不精のひげを剃る

人民券のお釣りしわくちや

冬^{ナオ}ざれの荷駄を引く驢馬とほとほと

月なほ冴えて偲ぶ長安

老酒で異郷に集ふ同期会

八百比丘尼と仇名呼び合ふ

チャイナ服恋の傷秘む脚線美

ライトに浮ぶ盗掘の跡

皮果箱^{ナウ}に自由を捨ててしまったの

大極拳は春風の中

万元戸一子大事や花の庭

砂漠遙かに笑ふ天山

平成二年七月三十一日 首

平成二年八月四日 尾

於 中国

註・嘉峪関に帰燕石と言ふ石があり、小石で叩くと燕の鳴く声をする。

・皮果箱はくづ箱

編笠に

大窪 瑞枝 捌

編笠に亡き子尋めばや風の盆

酒もてなさん月の軒下

早稲晚稲どの田も重く稔りゐて

キャンセル待ちで乗りし特急

フ^ウロントの鍵に添へをくメッセージ

婚約指輪見よかしにはめ

憧れの生徒会長たりし人

保護観察中六法を読む

ソーダ水苺パフェの細き匙

ヨットハーバーセールたたまれ

大窪 瑞枝 捌
大窪 孝子
坂本 孝子
雑賀 遊
子
枝 遊 枝 遊 枝 遊 子 遊 枝

洗^ナ礼名皆美しき島の村

大統領は鼻つまみもの

夫恋へば鬼火のやうに油井燃え

ラブミーテンダー影のすり寄り

着ぶくれてふられて猫を抱く月

うがひ空咳老のかしまし

鴉^{ナウ}啼く広告塔の屋根ふまえ

歩行者天国シャボン玉飛ぶ

妃殿下の笑顔に遇ひし花の夕

目張の煮付せせる塗箸

平成二年九月四日 首尾

於 富山——長岡車中

子 遊 枝 子 遊 枝 子 遊 枝 子 遊 枝

たふの峰

加藤 治子 捌

夏雲の奥踏み行くやたふの峰

若葉をもるる光まぶしき

白壁の蔵の扉は開きゐて

毀れオルガンぶかぶかと鳴り

十六夜に故郷を偲ぶ宣教師^ウ

宝くじ買ふ秋の街角

川渡り猪の群でたさうな

ただひたすらに老いらくの恋

弾むよにカルサン穿いた伊豆娘

夜の波止場に潮の満ちくる

月山 壹

矢崎 藍

月山富佐子

稲垣 渥子

柿本 時代

八木 聖子

加藤 治子

三岡 鑽次

壹

聖

ナオ
月出でて鮫鰯鍋の縄暖簾

マスクをはづし放つ濁声

都合よく忘れ上手の身となりて

株はやめたと捨てる新聞

どうならうと惚れたあなたの意のままに

紫色にしなだれた愛

ナウ
アカデミー受賞作品エトセトラ

無聊をかこつ春昼の猫

墨蹟に一期一会の花の席

弥生を惜しむ酒は菊石

後藤志津枝

藍

壹

藍

渥

藍

枝

聖

治

次

平成二年五月十五日 首尾

於 棒の手会館

花 霞

伊豆の海沖の小島も花霞

汐風うらら静かなる波

炉塞ぎに居ずまひ正す客とゐて

嬰の拾ひて遊ぶ一円

巡業^ウの櫓太鼓は月の下

はらうてくれた残り蚊が縁

そぞろ寒着瘦せのたちと知られたる

ニャンビタン飲むグルメ猫なり

リビアなる砂漠の砂の代赭色

「悪魔の詩」で撃たるるは誰

加藤 道子 捌

加藤 道子

立原 弘次

野瀬 知佐

式田 和子

金久保淑子

和

淑

道

次

佐

鷹匠^{ナオ}の腕に鷹は鈴鳴らし

亭主の留守に畳替する

やっちゃ場の嫁は早寝で子沢山

陶枕にまだ夢を見る月

夏山にハーケン打ちてザイル巻き

老母が守る辻の石仏

それぞ^{ナウ}れの越し方のよし友集ふ

紙風船で出るわらべ唄

枝垂れたるひとと桜照り映えて

蛭烏賊喰ひ満尾乾杯

平成元年四月十四日 首尾

於 本屋宅

和 次 淑 佐 淑 次 佐 同 和 淑

大 仏 へ

大仏へ遠足のバス連なれり

桜葉降る谷戸の坂道

漸くに春の火鉢を片付けて

鸚鵡からかふ午後のひととき

夕月^ウに羅の肌透きてみゆ

夏の風邪ひく女いとしき

長距離はコレクトコールで申し込み

へりで見下すナスカ地上絵

街角で酒酌み交す異邦人

野良猫増えて近所迷惑

金久保淑子 捌

金久保淑子

豊田 好敏

副島久美子

本田八重子

久

八

敏

淑

久

敏

ナ
オ
漱石忌積んどく本は堆し

老眼鏡をかけてはづして

美顔術見まがふばかり家の嫁

惚れ葉だと喰はす秋茄子

藁屋根にかゝりし月を仰ぎ見る

二百十日は無事に過ぎたり

オ
ウ
ベイサイド昔ベカ舟引きし浜

蛤買うて家苞にする

御神籤をむすぶ神木花吹雪

ながるる笛の音色のどけし

平成元年四月二十日 首尾

於 鎌倉おうめ様

久 八 敏 久 八 敏 久 八 敏 久 八 敏

鶯の

鶯の鳴き交ふ谷戸や風ぬくし

ほの紫に揺るる苧環

炉塞ぎて座敷も広く見ゆるらん

主居ぬ間にテレビ消す客

球^ウ場をめぐりてのぞく夏の月

おちよぼ口して氷金時

くどくのも騙されるのも息が合ひ

これが最後と老いらくの恋

隣国に余る石油のうとましく

砂漠に砂の描く紋様

蒲原志げ子 捌

松田多恵子

式田 和子

立原 弘次

蒲原志げ子

多 弘 和 多 和 同

ナオ
金泥に梵字写經の筆凍つる

豆狸おどして酒買ひにやり

国道は又も渋滞五〇軒

色に迷って萩をこぼして

柔肌を貴方にだけと月の宿

素知らぬ顔の障子切り貼り

ナウ
今様に変わる校庭遊ぶ子等

コンピューターで魚に餌をやる

通り抜け花も盛りの造幣局

蜂の巣作り日毎大きく

平成二年四月廿日 首尾

於 おうめ様

弘 志 弘 多 弘 同 弘 多 弘 志 弘

桜桃忌

上月 淳子 捌

水の音闇に響くや桜桃忌

ひらりと口に運ぶ削り氷けづりひ

宝石の品定めなどはづみゐて

膝から膝へ器量よき猫

織ウき月光増し来ぬやはらかに

父の背を越え少女爽か

ヌーボーで中年男に落される

始末に困る釣れすぎし魚

土地神話くづれて欲しい庶民です

危ふしゴルビーペレストロイカ

上月 淳子
岩田 玲子
山口みづゑ
森本 郁子

内田 麻子

玲 淳 郁 麻 忍

狼^{ナオ}とフライパンとの関係は？

賞与ぬくぬく有卦に入る月

三代目家業継がざる風来坊

瘤つき彼女連れてひょっこり

お爺ちゃんと呼ばれる程の年でなし

背筋立ちたる將軍の相

千社札高く貼りつけ仁王門^{ナウ}

春寒料峭粥のうまさよ

御衣黄の花咲き初めし山の道

鶴が引きゆく知床の空

平成二年六月二十八日 首尾

於 房連庵

玲 郁 麻 淳 玲 郁 麻 郁 麻 玲

後の月

米谷 貞子 捌

キャンバスに蒼重ぬるや後の月

窓訪れし薄野の風

旅の苞酸橘三つ四つ添へられて

仕事休みの食堂の椅子

新聞にトレード話ちらほらと^ウ

軽い期待で送る目くばせ

楽屋にてすれ違ひざま口づけし

プリマドンナの金の打ち掛

落葉踏む音犬つれてゐるらしく

時雨の井戸に洗ふ陶片

佛洵 健悟

孝

悟

枝

遊

孝

米谷 貞子

坂本 孝子

雑賀 遊

大窪 瑞枝

ナオ
磨崖佛仰ぐふたりは点となり

シンセサイザー恋に加速度

ロマンスカー別れても尚夢うつつ

杉箸割りてすする葛切

ほととぎすすいとかすめて月の面

夜も白々と辞世かきとめ

ナウ
観閲の列に国旗のはためける

不忍の池亀も鳴くころ

機織りの母ひさびさの花便り

蓼の芽めでつ人肌の酒

平成二年十月二十六日 首尾

於 小林亭

枝 悟 貞 遊 孝 同 遊 悟 枝 同

夕立

近藤 守男 捌

街一つ洗ひ上げたる夕立かな

初袷着て鳴らす塗りげた

厨より宅急便の声ありて

新刊雑誌卓に伏せられ

やはやはとこなす体操弦の月

剥かせしりんご今独り剥く

恋文の灰となりたるうそ寒き

リリーマルレーンCDの曲

いくさ止み外人部隊の父帰る

お国訛の抜けぬ付添ひ

佛 洵 健悟

木場田文夫

近藤 守男

悟

夫

悟

男

夫

男

夫

茶柱^{ナオ}を暫く見ては冬構

月に濡れたる河岸の水鳥

東西に往き交ふ人のトレンディ

アタッシュケースに詰める裏がね

島宿のひとつ枕に夢紡ぎ

柏手揃ふ金精の前

掘^{ナウ}り出せる江戸の茶碗に注ぎし酒

雲梯の蝶いつか離れる

目病して花の吹雪の中に佇つ

蓬摘みゐる山峡の道

平成二年五月十九日 首尾

於 牛込北町

夫 男 悟 男 夫 男 悟 夫 男 悟

囀りの小径

雑賀 遊 捌

囀りや小径ゆかしき井の頭

池のほとりに靡く芽柳

弥生尽ばらずし混ぜる半切に

漫画の後で開く教科書

夏^ウ瘦の猫抱く少女月の下

白檀の風そつと送りぬ

後添ひに乞はれて過ぐす一周忌

急場しのぎで流行る売店

民族の独立きびしリトアニア

歌はたちまち雪に消さるる

坂本 孝子

雑賀 遊

大窪 瑞枝

孝

遊

枝

孝

遊

枝

孝

大仕事了へし男の酒熱く

望み通りに決まるドラフト

齡上をすこし引け目に甘えさせ

素早く盗む蜜の唇

月光はいま尖塔の十字架に

新絹を縫ふ針のこまやか

老い母に秋狂言の切符買ふ

注意ひと声婦人警官

提灯をかけ連ねたる花の山

夢も長閑に揺れる終電

平成二年三月二十七日 首尾

於 井の頭公園

枝 遊 孝 遊 孝 枝 遊 孝 枝 遊

月下美人

坂本 孝子 捌

月下美人待つひそけさやもの刻む

出窓にくゆる蚊とり線香

新刊書自転車こいで運ぶらん

野球チームかバスに乗り来し

坂本 孝子
大窪 瑞枝
佛 健悟
山崎 光夫

十五夜のトランプを海に向^ウけ

洗礼済みし項秋寒

温め酒肌火照らせて切る電話

ハラスメントは愛の裏側

ベルリンの恨みの壁も崩れたり

世界注視の名画落札

枝 悟 夫 孝 夫 枝

狐狩^{ナオ}り柏手うちて一服し

わが影細くしるす凍月

死の日までエイズ語りしルポライター

夢のつづきに交すむつごと

振袖の抱けばかくりと人形ぶり

氷白玉匙をつきたて

山頂^{ナウ}のパノラマ晴れて雲もなし

小雀巣づくる分校の径

戯れて花くぐり行く肩車

叩く魚板は惜春の音

平成二年七月二十三日 首尾

於 式田邸

悟 夫 悟 夫 枝 悟 孝 枝 夫 悟

曼陀羅華

はらからの年忌参りや曼陀羅華

陽に柔きて緑蔭の貌ぼう

夕月に児等は氷菓を待ちぬらん

返事のしるしこちら向く犬

縫初ウの反物さらとひろげたり

かるた恋句にぼつと桃色

そんなこと言っていいのと俵万智

造り酒屋を揺るがすは誰

山々はブルトーザーの音響き

天空の鳶威銃がんを恐れず

両吟

式田 和子

鈴木美奈子

美 和

美 和

美 和

美 和

美 和

美 和

美 和

機窓より月見下しぬ羽田沖^{ナオ}

土産に買ひし孵化の鈴虫

初めての外出なりし修道尼

懷妒替りに抱いてぬくめる

ほだされてちよいのつもりが大火傷

小店三寸板売りの香具師^{やし}

年経れば青春の日々くつきりと^{ナウ}

雪代やまめ影のきらめく

急流を綾なす花のアラベスク

親子連弾フーガのどらか

平成元年七月八日 首尾

於 名古屋往復新幹線車中

和美和美

和美和美和美

柿たわわ

坂の上の館仰ぐや柿たわわ

雲の切れ間に淡き昼月

鯊釣の川面を下る船ならん

大欠伸して煙草とり出す

カラオケのボリュームいっぱい聞えくる^ウ

ついておいでと言ってほしいの

日焼止め足の裏まで塗ってやり

いつか崩れし箱庭の砂

東西の独乙統合平穩に

ドルを土産にまめな宰相

篠原 達子 捌

篠原 達子

小野 シズ

若尾よしえ

稲葉 道子

町田 順風

茂田キヨ子

ズ

風

え

キ

波羅蜜多^{ナオ}円空様のみそなはす

仔牛生まれてみんなたれ目に

街中へ嫁来いデモのトラクター

ネグリジェ抱けば魔女の踊る

冬の月戸を少し開けひとり酒

仲よく絵本幼な兄弟

長病^{ナウ}みの老母へ電話こまごまと

あたり香らせオレンジを剥く

相模湾遥かに見えて花万朶

右へ左へ移る囀り

平成二年十月十日 首尾

於 世田谷区梅丘会館

道 達 風 道 道 キ え

幣辛夷

幣辛夷風と語りてゐたりけり

帰雁はろけくゆきし街並

鮎膾銘々皿に盛りつけて

自慢のパイプ燻らする父

すれ違ふ月のデッ^ッキの夜会服

抱けばしっとり露のおもたさ

定家の忌京もはづれの古き寺

お蔵ぐるみで道具買ふなり

いま怖いぎっくり腰と前立腺

琥珀燦めくペルシャ猫の眼

膝送り

下坂 元子

坂本 孝子

豊田 好敏

元

孝

敏

元

孝

敏

元

早星^{ナホ}民族自立の声高く

焼酎いっき学生^{ナホ}の群

旅の荷は夢でふくらむ鞆^{ナホ}だけ

可愛がられて貰ふ小遣

寒弾の血のにじみたる指吸はれ

雪女らし月浴びて佇^{ナホ}つ

瞑想^{ナホ}は老の娛しみ湯に入りて

芳しき香に茶を焙じゐる

ジョッキーの勝利の辯は花の下

山連なれり春光の涯

平成二年三月二十六日 首尾

於 四宮集会所

孝 敏 元 孝 敏 元 孝 元 敏 孝

なんぢゃもんぢゃの花

下鉢 清子 捌

なんぢゃもんぢゃの花のこぼるる大地かな

風の薫りて幼らの声

キルト展誘ひ合ひつつ集ふらん

広角レンズカメラアングル

秋元 正江
須田 智恵
瀧川 雅代
下鉢 清子

琵琶の湖舟漕ぎ出し月を待つ

くるくると剥くありの實の皮

古酒一杯恋人すでに茹でだこに

デートノウハウ役立たぬ本

円とドルシーソーゲームヨーロッパ

眞贋論義謎の仏頭

恵 江 代 江 恵 江

やつかがし焼けば近所の猫が寄り

スノウ・チェーンを捲いてゐる月

故郷は父祖の田畑すでに無く

初婚のわれと子つき嫂

飲ませやる気付薬は口うつし

亀占ひの陰陽師なる

隣りより^{ナウ}またも民謡はじまりぬ

火鉢の灰をならす春愁

夢の字の帯ゆるやかに花衣

端山を越えて帰り行く嶋

平成二年五月十三日 首尾

於 光ヶ丘近隣センター

江 代 子 江 代 子 江 代 子 恵

大晦日

鈴木美奈子 捌

鉄斎の軸掛け替へて大晦日

豊田 好敏

白磁の壺に活けし萬両

尾口 幾子

外車来ぬ子等われがちに触るるらん

式田 和子

爪先立ちの犬の愛嬌

中川 哲

チチカカ湖インカは滅び月悠久

安永 朋子

邯鄲の声抱擁の後

哲

唇の黒き葡萄を唇へ

朋

回り将棋の駒の倒れぬ

和

労咳の病院いまは精神科

哲

ファイトファイトとジョギングの列

敏

ナオ
パッチンと指で注文生ジョッキ

軒をかすめて夏燕翔ぶ

新発意の声変りして普門品

教へてやるとかはるがはるに

月凍つる思ひ切りたき事多き

好きでなくとも玄米を喰ふ

ナウ
ビリヤードキネマサーカス酒連句

春のパルソルフリルいっぱい

夢うつつふるさとの街花の辻

茶摘の籠の見ゆる山麓

幾

哲

和

同

幾

同

朋

敏

鈴木美奈子

敏

平成元年十二月十一日 首尾

於 渋谷連句会

野 分

副島久美子 捌

国道の野分避けゆく塾帰り

豊田 好敏

うち靡きたるコスモスに月

杉江 杉亭

むらさきの通草を籠に盛り上げて

式田 和子

一くぎりする和裁内職

副島久美子

ベ^ット屋のベ^ット鳴声競ひ合ひ

亭

鮫鰯鍋の煮え頃もよし

敏

「お蒲団を敷きますから」と女中さん

久

使ひ古した偽名いろいろ

和

付け廻すC・I・AやK・G・B

敏

東シベリヤ西はアフリカ

亭

ナオ
返り梅雨パイプの煙くゆらせて

ふと立ち上る郭公の声

乱高下続き通しの株価表

心変りを詰る公園

月の夜又惚れ直す風邪声に

南無也八幡大菩薩様

ナウ
能舞台襲名披露賑はしく

墓こっそりと穴を這ひ出で

鳥取の砂丘風紋花を置き

地酒片手に旅のうららか

平成二年九月二十一日 首尾

於 横須賀線車中

久 和 亭 敏 和 久 敏 亭 久 和

鶴 来 る

鶴来るや寧きを切に即位の日

冬あたたかき玉砂利の音

綾取りの紅の梯子のつくられて

大皿に盛り飴と煎餅

小望^ウ月夜学の終る頃となる

めくされ市に誘ひ誘はれ

「やや寒」と言ひつ触れ合ふ肩と肩

止まり木に寄り甘きカクテル

開拓の歴史をつづるカウボーイ

宇宙遊泳運まかせなり

瀧 川 雅 代 捌

瀧川 雅代

北見さとる

下鉢 清子

東 郁子

桑原 正敬

清

郁

る

敬

清

うやむやの関越えて来し夏の月ナツ

腕白坊主汗疹いっぱい

父子二代演ず鬼平犯科帳

からしぴりと効きしお叱言こぞ

厳肅な事実早やばや岩田帶

逆玉の輿的をはづさず

風紋オウの起伏の果に海の照り

忽ち消ゆる春の淡雪

俳諧をあまねく広め花万朶

胡座で会釈交はすのどけさ

平成二年十一月十一日 首尾

於 南柏光ヶ丘センター

敬 郁 る 同 清 る 郁 敬 清 る

芽ぶき

棄てられし庭にも春の芽ぶき哉

日は麗かに門とぞす家

親子連れ入学式に出掛くらん

晴着を装ひ母も若やぐ

月明^ウき大淀川に舟遊び

ビール注ぐ手にこもる肩入れ

触れし指溢るる思ひ燃ゆる如

あつと云ふ間に煙にまかるる

商魂はスプリンクラーも忘れ果て

騒ぎしづまる夕暮れの空

膝送り

千木良果然

藤井 草舎

馬場 彬風

平野 桜丘

田原竹無齊

尾向 閑堂

舎

然

丘

風

ナホ
古き詩咳きながら口吟む

炭の鳥鍋煮ゆるほどよく

待つ人のや々と訪れ夜半刻

月下に君と夢幻抱擁

音もなく萩のこぼるる静かさよ

木の間に山の見ゆる新涼

ナウ
喜寿となり都落ちせん世を避けて

こころも軽くつとむいとなみ

宝塔に限りなく降る花吹雪

茶店の主草餅を売る

堂 齊 堂 舍 丘 堂 齊 然 風 舍 丘

平成二年三月十九日 首尾

於 興流会談話室

終戦忌

豊田 好敏 捌

まぶしかり雲の白さや終戦忌

上弦の月のぼる城跡

栗饅頭四歳^よになる子がせがみゐて

バリカン使ひ犬の毛を刈る

豊田 好敏
佛淵 健悟
中川 哲
安永 朋子

難民^ウの日本語会話流暢に

愛と恋との区別曖昧

送られて送り返して別れ橋

わたくし味にちよつとこだはり

書き初めに代へてワープロ打ち初めし

土間一杯に並ぶ雪靴

悟 哲 敏 朋 哲 同

御巢鷹^{ナカ}の峰に届けと経^ネの声

式田 恭子

習ひし芸で生くるてだてを

男帯いつか解^{ほど}けて夏の月

蜩川にて黒き肌抱く

アトリエのキャンバスの画架そのままに

思ひがけなく貰ふ勲章

敏 哲 朋 悟 恭

ひな鶏^{ナニ}を尻で見分ける鑑別士

肴飯蛸酌み交す酒

花追ひて深夜特急結ぶ夢

都踊りも「千秋楽^{ちゅうらく}」近き頃

敏 哲 朋 悟

平成二年八月十三日 首尾

於 渋谷連句会

鳥の歌

弾初めのチェロはカザルス鳥の歌

ピアノに飾る木版賀状

草原に武士の駒脚並めて

はるか彼方に白き山脈

十五夜の出を待つテラス風さわぐ^ウ

つゆけき夜半に偲ぶかの人

椎の実に遠きおもかげ胸あつく

備前の盃にぬるき「立山」

祇園会にそぞろ歩きの楽しくて

疎水にうつる沙羅に佇む

中島 啓世 捌

中島 啓世

山崎 昭

山本 直民

藤井 弘美

川津 幸子

山本八乃子

中村 弘

尾形 久子

美

弘

ナオ
赤壁の農家点点カトマンズ

グラスに踊るろうそくの影

髪長き君に会はんと海の町

死ぬの生きるの夜の明けるまで

凍蝶の行きどころなき朝の月

古き机で寒卵割る

ナウ
新テスト新聞記事に母のぼせ

城址につづく春泥の道

それぞれに紫の雲花の舞ふ

鐘つく音も霞む大寺

平成二年一月十五日 首尾

於 葉山 藤井弘美宅

昭 弘 美 同 弘 民 昭 八 久 幸

影涼し

中田あかり 捌

外壁は油性モルタル影涼し

中田 敏三

玉巻く芭蕉浅く置き肥

中田あかり

幼な兄の琴弾く構へ凜として

中田 淳子

お座敷犬の人臭き顔

三

月蝕^ウの終り満月生れ出づ

子

鯊釣りの竿かつぎたる肩

り

ロザリオ祭やまとうなばら良き香り

三

釈迦も孔子も遠国^{おんごく}の仁

り

口紅を買って夕焼見て帰る

子

一瞬向きし瞳うれしき

り

ナオ
大男黙していても頼もしく

のっしのっしとジャワの密林

解らないことばかりなの何もかも

秋の蚊拂ひびく腰痛

山脈を照らして月は天心に

願の糸を吹き流す風

ナウ
付加年金もらひ端溪手に入れし

蜆汁には赤味噌が合ひ

みなれたる後姿に花散りぬ

囀の中走る自転車

平成元年七月三十一日 起首

平成二年四月三十日 満尾

於 中田宅

子 り 子 三 り 三 り 子 三 子

湯治宿

湯治宿潮騒を聞き昼寝かな

木地の座卓に盛りし甘瓜

パレットの油絵具のつやありて

誰が来たのか爪伸ばす猫

満^ウ月に吾が影法師長く曳き

ふと匂ひける籠の舞茸

残菊に出張の夫面やつれ

互ひの不倫隠す虚しさ

近頃のグルメブームをけなしつつ

故郷憶ふひとときの閑

両吟

中田 淳子

中田あかり

子　　り

子　　り

子　　り

子　　り

子　　り

子　　り

子　　り

戸^{ナホ}を叩く姥捨山の生きのこり

原罪あれど副牧師なり

土一升黄金一升冬の月

鶴の渡りの噂ちらほら

結婚の相手は親の知らぬ人

アッシー君がいつか本命

看護婦は腰痛のわれいたはりぬ^{ナウ}

熱帯魚飼ふ部屋に蝶々

枝垂るるも時分の刻や花吹雪

種蒔きながら歌ふ童謡

平成二年九月二十三日 首尾

於 稲取温泉

子 り 子 り 子 り 子 り 子 り

花の房

てのひらに湿るいのちや花の房

宙にとどまる分身の蛇

春座敷窓のカーテンよくゆれて

あるじ自慢の蕎麦を打つ音

ひとり入る月の涼しき野天風呂^ウ

恋の炎に身を投げる火蛾

捨てられる前に捨てようあの男

つぶし島田を丸鬚に結び

駅の前新聞風に舞ひ上り

電話ボックス人影も無し

両吟

橋爪万津子

小出きよみ

万

み

万

み

万

み

万

み

此の冬は又時代劇はやりにて

頬被りとり神ををろがむ

五十年連れ添ひし妻病得て

コスモスのごと可憐なりしが

金色のへりうち廻す月の雲

佛蘭西にある民主団体

ワープロ^{ナウ}を打って家族は猫親仔

こそ泥のやつ菜飯まで喰べ

八重桜満開牡丹桜二分

臍おぼろにゆるき坂道

平成二年四月十五日 首尾

於 車中及び伊那北八幡寿司にて

万 み 万 み 万 み 万 み 万 同

薄紅葉

急坂やたたずみ仰ぐ薄紅葉

障子入れたる家々の軒

月明しグラスに酒の注がれて

タンゴかワルツどちらかけましょ

胸^ウを張りわざとつくりししかめ面

修羅場をくぐる恋のかけ引

普化僧が枡席にゐる名古屋場所

さつと一雨ほしい睡蓮

銅版のゴシックの塔影の濃く

歌声おこるドイツ統一

八角 澄子 捌

八角 澄子

下坂 元子

下鉢 清子

若尾よしえ

瀧川 雅代

山崎 一恵

清

代

元

え

ナオ
転勤の荷物にくさやひそませて

朝夕祈る産土の神

ぼっくりに筥迫持ちてお茶屋まで

「あなたいのち」で又も抱かるる

古暦水に流れし月の隈

旅のみやげに赤ベコを買ひ

ナウ
仁丹で万病治す医者もあり

春の蜜柑の少し酸っぱく

花しだれ俳諧に夢育てつつ

あとさきになりついてくる蛇

平成二年十月三日 首尾

於 山王

元 恵 同 代 恵 清 元 代 清 恵

西行や

原田 千町 捌

西行や見のがす澤の閑古鳥

庵のほとりに咲き揃ふ著莪

カメラマン手慣れし様のなごやかに

紅茶に添へる銀のスプーン

うづくまり月を浴びつつ眠る猫

秋の夜長の読書週間

肌寒み若き神父に懺悔して

ピ。アス落せば虚ろなる音

来る度になほ伸びるらし都庁ビル

違法駐輪遊ぶ子供等

大淀三千風

原田 千町

内田 麻子

佛洵 健悟

副井 隆秀

副島久美子

秀

悟

麻

悟

赤髭^{ナオ}の無造作に打つ注射針

福無量とは信州の酒

旅好きで鞆そのまま又出かけ

四十チヨンガーもてる冬月

だんだんとひとつ掻巻熱くなり

古き時計のゆるむ撥条^{せんまい}

実家^{ナウ}の母童^{きと}し返りの仏顔

蜆売^{かき}り行く山裾の街

咲き満ちて散りもあへざる花に佇ち

春の調べの流れ寄りくる

平成二年五月十二日 首尾

於 鳴立庵

秀 麻 久 麻 悟 秀 秀 麻 久 麻 町 悟

時雨忌や

東
郁子
捌

時雨忌や翁遺愛の蛙石

冬浅き庭訪るる人

草野球集ひ来る子ら賑やかに

手挽きコーヒー碗に香の立つ

創刊^ウのねこみの通信つくる月

呼び出し電話声のやや寒

青蜜柑分け合ふだけで充ち足りぬ

いつもの烏またも来てゐる

組鐘^{カネ}が響くケルンの大聖堂

除隊の知らせ母の手許に

東
佛洵
小林
八角
澄子
健悟
千雪
澄子
悟
雪
悟
澄
同
悟

水芭蕉観^{ナオ}んと溢るる夏帽子

暮仇と酌む月の冷酒

下町の玉三郎の嫺やかに

大立廻り死ぬの生きるの

悪妻と言はれ続けて半世紀

ラジオ講座の流すロシア語

北方^{ナウ}の領土還るはいつの日か

魷挿す湖を珍らしと見る

花明りはるかに遠く裏伊吹

名物の店草餅の色

平成二年十月十七日 首尾

於 深川芭蕉記念館

雪 郁 悟 雪 澄 悟 雪 澄 雪 澄 郁

二月尽

佛 洌
健 悟
捌

玻璃越しに街騒聞きつ二月尽

モノレール見ゆ淡雪の中

岸辺にもボートレースのうねり来て

呼びかけられし猫の振り向く

式田 和子
若松 隆一
近藤 守男
木場田文夫

湯治場の人に玉兎の影^ウ冴ゆる

早う子生せと叩く粥杖

夫放りウグイス嬢のバイトして

徹夜で並ぶドラゴンクエスト

塀高き大村難民収容所

山の方から通り雨降る

男 子 一 夫 一 子 子

明日よりの祭りの準備たけなはに^{ナホ}

佛 健悟

玉の汗噴く兵児帯のにせ

夫

指三本あつけらかと女子高生

一

回転ベッド陰にこほろぎ

和

真夜中の月出づるまで議論して

一

休耕田のかかし引き抜く

夫

やはらかに魚煮付ける老いの膳^{ナウ}

和

鴨居をくぐる紙の飛行機

夫

花吹雪天文台も埋むらん

悟

青きを踏みて戻る春昼

一

平成二年二月二十四日 首尾

於 慶応病院

梅の夜明け

峯田 政志 捌

咲ききれぬ軒端の梅の夜明けかな

峯田 政志

囀りを聞き子等の足音

佛淵 健悟

壺焼のとげの手触りたしかめて

志

掛かる投網は飾り物なり

悟

回^ワ国の径^ワ
^ワ
^ワ
^ワ 冴え冴えと月照らし

志

破れし襖にひそと睦言

悟

相傘に肩ふるはせる芝居する

志

ベンツに座る犬の見目良き

悟

洋上に相場ニュースの荒れ模様

志

独裁政治つひに崩壊

悟

吹く汗を拭ひもせず^ナに老教師

麻暖簾吊るマンションの部屋

密売の符丁あれども知らぬふり

ちろりん村は溝萩の中

アリランのか細く流れ昼の月

とんぼを銃に歩哨動かず

美^{ナウ}し酒酌みつつ釣果あれこれと

丈比べせし印見つける

花万博テープカットも秒読みに

列車の後に苜蓿揺れ

平成二年三月三十一日 首尾

於 北新宿

志 悟 志 悟 志 悟 志 悟 志 同

白木 謹

白木謹久々に訪ふ記念館

玻璃戸にうつる夕月の影

鯊釣りの人の傍ら猫もゐて

少しゆるめの靴の幼な子

好物のチーズケーキを皿にとる^ウ

BGMは恋のシャンソン

ひかり号社長と秘書は別々に

神へひそかに十字切るなり

中東の危機対岸の火事ならず

なか吊り広告風邪の妙薬

村田 富美 捌

水鳥ますみ

真田 光子

倉本 路子

村田 富美

小林 千雪

み

光

み

同

路

甘言に老のへそくり底をつく^{ナホ}

極樂往生ゆめのまた夢

灼熱の須磨子のサロメ首を抱き

きぬぎぬに泣く蚊帳のうちそと

夏の月出づるを待ちて酒を酌む

父母在すふるさとの山

かつら剥き庖丁づかひ上手くなり^{ナウ}

梁にとまれる大熊ん蜂

舞ひ散りし花を泛かべて祇園川

陽炎のなかしばしまどろむ

平成二年九月二十九日 首尾

於 芭蕉記念館

雪 光 同 路 雪 み 光 雪 美 路

沈丁の香

沈丁の香をいとほしむ谷戸住ひ

皿にほっこり鶯の餅

春暖を背に受けたる子等のゐて

競りの市場に犬を追ひつつ

北^ウに行く列車の止まり月涼し

乳房の揺れる羅の女

今の世に業平氣取り醬油顔

会社をサボリドラクエを買ふ

膝しびれやつの思ひどっこいしょ

いい湯いい味甲州の宿

本屋 良子 捌

加藤 道子

杉江 杉亭

立原 弘次

豊田 好敏

亭

道

敏

本屋 良子

次

亭

磨崖^{ナオ}仏ふところに入れ山眠る

雪の女郎に誘ひ込まれて

わたし好き裏の裏まで知る彼氏

萩の繁みで語り合ふ影

月明り窃盗団は外人で

粗朶^{ナオ}にかかりし落鮎^{ナオ}を捕り

独酌^{ナオ}も気ままなものよ定年後

叙勲の宴は学士会館

花の庭陣取る声も賑やかに

肩にとまりし黄蝶一匹

昭和六十二年二月十九日 首尾

於 逗子本屋宅

道 亭 次 良 敏 次 亭 良 敏 次

落椿

若松 隆一 捌

瀬の音にいたはり寄るや落椿

翅ゆるやかに飛びし初蝶

入学児開く図鑑の匂ふらん

洗濯籠に縫ひぐるみ入れ

パート終へ化粧直せば月冴えて

非常階段息白きキス

研修の医者のおは氣を使ひ

ころころ太る避妊せし猫

ご自慢のカレーに仕込む隠し味

兄弟揃ひカラオケに沸く

若松 隆一
式田 和子
佛洌 健悟
木場田文夫

悟 一 子 一 悟 夫

三角のお礼は四万六千日^{ナホ}

相場師急ぎ日盛りに行く

キーボード叩く娘の耳に金

ふとした仕種深く身に入む

秋風の月の信濃へひとり旅

「お焼き」の旗の爽やかに揺れ

老人のライフワークの大魚拓^{ナウ}

お宮参りの初孫を抱き

まなうらに溢れて故国花の山

石路を採る谷陰の道

平成二年三月二十四日 首尾

於 早稲田「きむら」

子 一 悟 同 一 悟 一 夫 子 夫 一

半歌仙
◇

ぬくめ酒

木場田文夫 捌

ぬくめ酒夜行列車の揺れやさし

湾岸通り月は限なく

銀杏散る大道芸の集ひゐて

一輪挿しを格安で買ふ

夏座敷地図を広げてなぞる尾根

デポジット缶の溜まる裏庭

新^ウしき英語教師の声すがし

日曜学校顔が見たくて

抜き差しのならぬ身となりボランティア

取り出す玉は彼の思ひ出

佛 健悟

若松 隆一

木場田文夫

悟

一

夫

悟

一

夫

悟

湖に漕ぎだす舟のひと筋に

熱き番茶に茶柱の立つ

ペンションに親子狸のいでて月

ピアノ連弾窓は木枯し

定年を少し余して職を退き

瀬戸大橋を越ゆるお遍路

花屑に取り巻かれゐる子規の句碑

草餅の香のまじるそよ風

平成二年十月十八日 首尾

於 寝台列車「あさかぜ3号」

一 悟 夫 一 悟 夫 一 夫

あとがき

連句猫蓑作品集Ⅰをお届けいたします。

この作品集は、平成元年一月から平成二年十月までの作品を、歌仙、二十韻夫々捌一人一編を基準に参加して頂いたものです。平成という新しい世に誕生した第一集ということで、意義深い作品集となっていると思います。

明雅先生にお目通しを賜りました後、歌仙二十六編、二十韻三十七編、半歌仙一編を五十音順に配列録することができましたが、先生のご提案であられる二十韻が多いというのも、時代に相応しい型であるからでしょう。今後益々普及することと思われます。歴史的仮名遣い中心に、また連衆のフルネーム如何と、整理しつつ拝見しておりますと、序破急の面白ささすがに、捌の方々の熱意が伝わって胸が熱くなったものです。

一月十四日、明雅先生、式田和子様にご足労を頂きまして印刷所へ、細部まで打合わせることができましたことは誠に幸いでした。

二月十四日、光ヶ丘近隣センターで早朝よりの初稿校正には、八の会のメンバー梅田利子、下

坂元子、瀧川雅代、八角澄子、山崎一恵、若尾よしえの諸氏がお手伝い下さいましたことお礼申し上げます。

このような作品集が発行され、良い作品が多くの人目に触れ、また残すことができますことはまことに至福、会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、年毎に号数を増やすことができますように願っております。

平成三年三月吉日

下 鉢 清 子

猫蓑作品集 I

平成三年三月吉日

発行人 東 明 雅

編集人 猫 蓑 会

定価一、五〇〇円（郵送料実費）



